

2019年度「全団調査」報告書

◆ はじめに

この度の全団調査の実施におきましては、全国の団委員長をはじめ、多くの皆様にご協力をいただき心より御礼申し上げます。全国の調査概要がまとまりましたので、ここに報告いたします。今回の調査は、中途退団の理由を調査するだけにとどまらず、各方面で活用いただける内容であることから、県連盟、および地区単位でも集計データを分析していただき、調査の趣旨でもあります中途退団抑止はもとより、加盟員拡大(組織拡大)につなげられる「次の一手」に取り組んでいただけると幸いです。

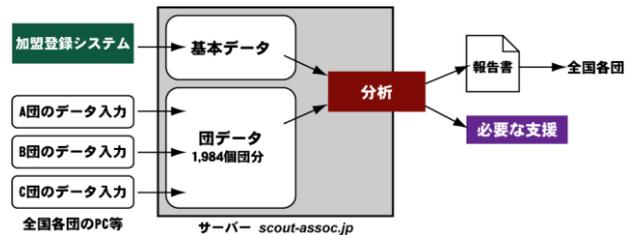
中途退団抑止特別委員会 委員長 膳師 功

◆ 全団調査のねらいと仕組み

全団調査は、日本連盟 2019年度 事業計画の成果目標 2.中途退団抑止対策 ②にある、「登録審査にかかる全団実態調査を行い、必要な支援に着手する」に基づくもので、同時に団審査の現状調査も行いました。全団調査から見えて来た中途退団の傾向から、「必要な支援に着手する」ための提言をしていきたいと思っております。

全団調査は、ウェブフォームから各団が情報を入力することで、データの収集を行います。また、各団からの入力データとは別に、加盟登録システムから得られる各団の年齢別スカウト数・新規入団数、指導者と中途退団者個々の年齢・性別等のデータなども基本データとして準備しています。

これらのデータを随時集計し、組み合わせて分析することで、全団調査が構成されています。



◆ 新規入団数と中途退団数(基本データから)

基本データとして、年齢別の新規入団数と中途退団数がありますが、それらをグラフにすると、図1・2のようになります。新規入団はCSまででほぼ終了ですが、中途退団はRSまでずっと続いています。

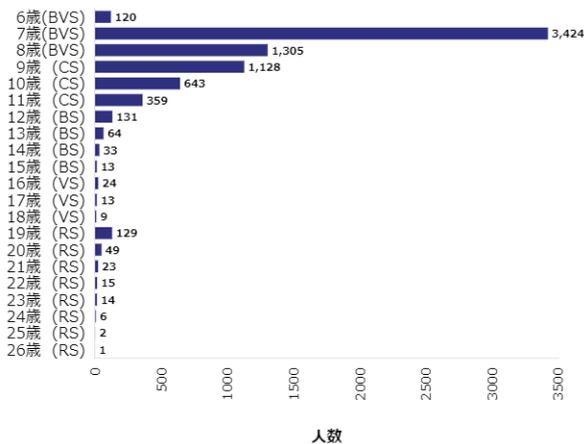


図1 年齢別入団者数

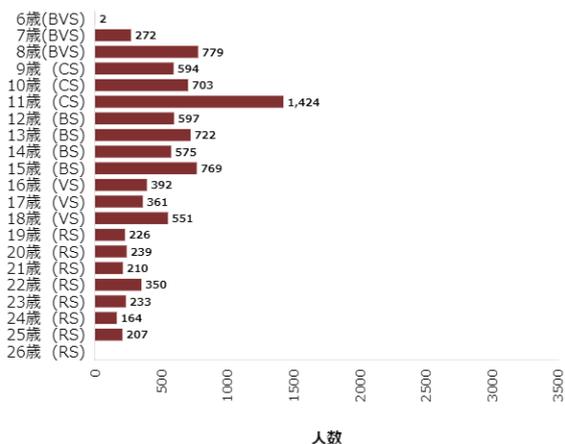


図2 年齢別退団者数

その数を累積でグラフにすると図3のようになり、BVS・CSまでに確保した新規入団を、VSまでで使い果たし、最終的には2,000名ほどの減少になっていることがわかります。

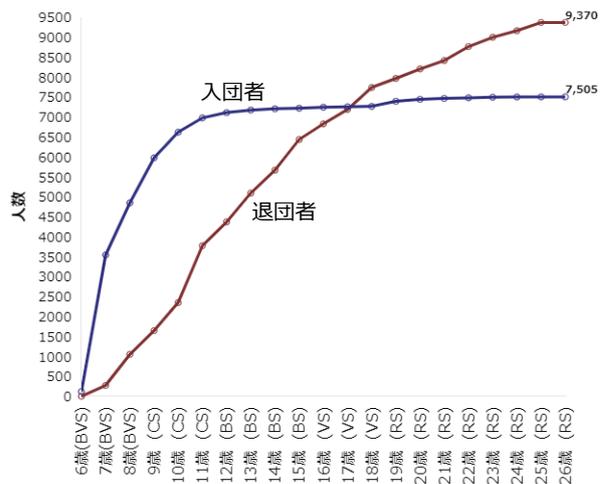


図3 入団者と退団者数の累積

これは時間的変化を表したものではありませんことに注意してください

ここから加盟員数を増やすための対策として、次の視点が明らかになってきます。

新規入団については、今の傾向のままBVS・CSの新規入団をもっと増やすか、今はほとんどないBS以降の新規入団を確保することが対策として考えられます。

中途退団については、全般的に抑制することが必要ですが、新規入団が今のままCSで終わってしまうなら、特にBS以降の中途退団を抑制することに着眼して対策を考えることも良いと思います。

もちろんそれらの対策は、総合して行われるべきでしょう。

◆ 各団からのデータ入力状況

各団からのデータ入力は、6月20日付で県連盟を通じて依頼し、9月15日に締め切りました。回答は図4のとおり進み、締め切り時点で52.4%の回答しかありませんでしたが、引き続きの入力をお願いしたところ、回答が続き、2月24日時点で74.7%の回答率に漕ぎつきました。

しかし、この2ヶ月ほどグラフは横ばいで、新たな回答はほとんどありません。これ以上待っても大きな変化は無さそうですので、2020年2月末をもって報告させていただくことにしました。

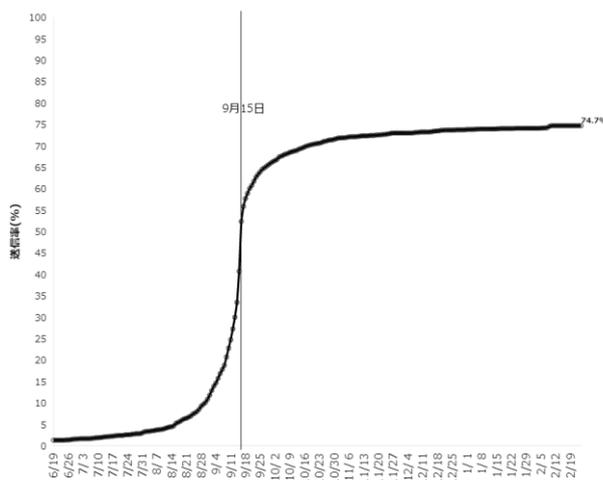


図4 回答送信状況

中途退団の状況

◆ 中途退団と性別

今や全スカウトの25%を女子が占めますが、年齢が上がるに従って、女子の比率は徐々に低下していきます。つまり、女子の方が中途退団しやすいといえます。しかし極端に女子が減っていくわけではありません。BS以上になると野営等の活動が増えて女子の活動が難しくなることが心配される中、工夫して活動できているようです。

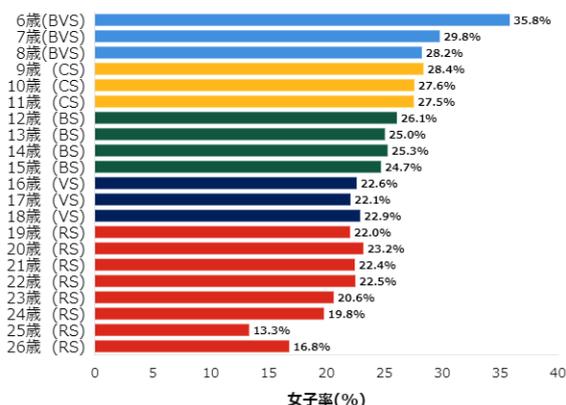


図5 学年別女子率

◆ 中途退団の時期

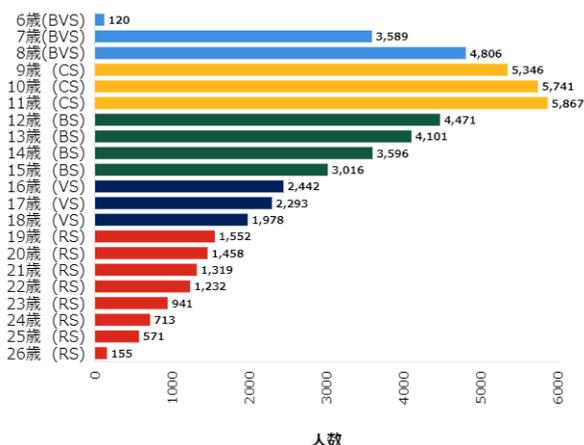


図6 学年別スカウト数

基本データから分かるのは、図2にあるように、CSの最終学年での退団が、他の年代に比べて倍近くあるということです。

新規入団はCSまででほぼ終了しますので、各年代の人数は図6のようにCSの最終学年でピークになっており、そこでの減少は目を引きます。

さらに各団からの入力データによると、月別に見ても上進時か3月に集中しており(表1)、「上進」という境界が中途退団のきっかけになっていることが分かります。

表1 退団時期・部門別 中途退団人数

退団時期	BVS	CS	BS	VS
不明	78	191	289	154
上進時	370	1002	730	369
4月	41	82	140	82
5月	14	28	60	17
6月	17	42	39	16
7月	14	34	43	11
8月	20	63	71	20
9月	31	77	93	37
10月	10	55	52	9
11月	18	37	19	11
12月	25	72	57	33
1月	15	37	40	17
2月	11	30	35	22
3月	169	464	504	277

実際にはCSからBSだけでなく、BS以上でも上進時点での退団は多く、上進率は75%以下で(図7)、「上進」というものが大きな障壁になっていることが分かります。

しかし、CSからBSへの上進時点での退団は、班制教育を中心とした本来的なスカウト活動が始まる前での退団であり、運動の推進の観点からは特に注視すべきです。

CSからBSへの上進時点での退団を詳しく見ると、退団までの経験年数はあまり関係ないことが分かりました(表2)。十分に活動したから退団するというのではなく、「上進」がきっかけになって退団を考えてしまうようです。

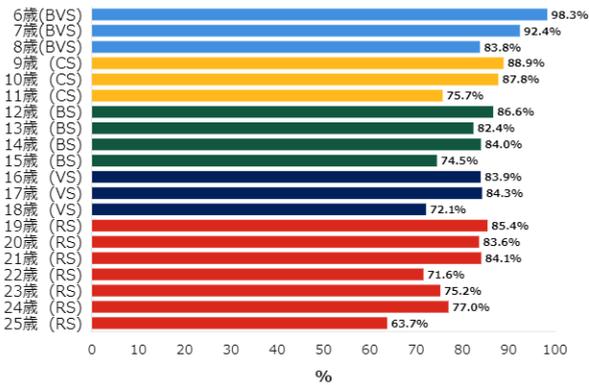


図7 学年別増減率(上進率)

表2 CSからBSへの上進における経験年数別 退団者数

全退団者数	経験年数					
	0年	1年	2年	3年	4年	5年
1,424人	64人	203人	318人	251人	362人	226人
	4.5%	14.3%	22.3%	17.6%	25.4%	15.9%

比率は上進時の全退団者数(1,424人)に占める割合です
0年が少ないのは、くまでの新規入団が少ないためです

◆ 中途退団の理由

表3のとおり、BVS・CSはその他の活動の優先、BSはクラブ活動優先、VSでは(塾など)学業優先が、最多となりました。

表3 退団理由・部門別 中途退団人数

退団理由	BVS	CS	BS	VS
不明	86	207	184	113
(塾など)学業優先	74	387	463	295
学校生活と両立できない	17	70	290	193
クラブ活動優先	81	314	644	166
その他の活動優先	265	596	196	91
楽しくない・興味がない	52	145	127	41
他のスカウトとの関係の悪化	7	31	20	3
指導者との関係の悪化	3	10	10	2
転居	81	133	75	58
病気・ケガなど	12	36	41	6
引退	2	34	10	22
経済的理由	9	31	29	9
転団を希望	4	6	0	2
その他	140	214	83	74

詳細は省きますが、地域差はあまり見られませんでした。団の規模による違いもほとんどありませんでした。

BVS・CSで優先された「その他の活動」は、入力された理由の「詳細」から、スポーツと習い事が多いことが分かりました。

総合していえるのは、退団理由のほとんどは、ボーイスカウトではない他の活動を選択したことであるということです。

「楽しくない・興味がない」という理由は、比較的少数でした。しかし、活動がもっと楽しく・興味があるなら他の活動を選択しなかったことは十分に考えられ、他の活動を選択したという理由の中に、「楽しくない・興味がない」が内在していると思われます。

スカウトや指導者との「関係の悪化」を理由にした退団はあまりありませんでした。表に出にくいことなので、他を理由にした可能性は否めません。

退団理由に「その他」を選んだものが結構あります(BVSからVSで510人)。その詳細を見ると、活動になじめない(野外活動が苦手)、発達障害・不登校などの理由で継続できないものや、母子家庭・離婚など、対応が難しいケースが多く見当たる一方、

- ・親が送迎できない 38人
 - ・兄弟や友達が退団する 30人
 - ・他に女子がいない・同世代が一人 24人
- など、団の活動環境が原因になったケースもありました。

◆ スカウトと親の意向

スカウト本人が退団を希望している場合、親も退団を希望している場合がやはり多いです。しかし、BSになると、BVS・CSに比べ、親は続けさせたいと考えているか、迷っている場合が多くなります(表4)。

表4 スカウトが退団を希望している場合の親の意向

	親の意向			
	退団したい	続けたい	迷っている	不明
BVS	69.1%	15.5%	9.9%	5.6%
CS	64.5%	17.8%	10.2%	7.5%
BS	54.1%	24.5%	12.4%	9.0%
VS	61.1%	16.8%	14.7%	7.4%

さらに、BSで「楽しくない・興味がない」を理由に退団したスカウト127人では、50人の親(39.4%)が続けさせたいと考えていたようです。

BSまで来ると、親はスカウト活動に対する理解が深まり、ここまで続けてきたのにやめるのは惜しいという気持ちが働くのだと思われます。うまく説得できれば、退団せずに残った可能性があります。これはBS以上の退団を防ぐヒントになるのではないのでしょうか。

◆ 中途退団の影響

団の規模は退団理由にあまり関係しないことが分かりましたが、退団による影響は、かなり違うと考えられます。

日本連盟では、団を表5の基準でカテゴリーに分類しています。

表5 カテゴリーの分類

項目	全団	カテゴリー				
		S	A	B	C	D
スカウト数		100以上	65~99	40~64	20~39	19以下
該当回数	1,984	19	101	335	714	815
構成比	100%	1.0%	5.1%	16.9%	36.0%	41.1%

S・Aカテゴリーの団は、退団も多いですが入団も多く、退団が上回っても団全体の人数に対し微減となるだけで、「短期的には」大きな影響がありません。しかもSカテゴリーについては、入団が退団を上回っているケースが多く、ますます増える傾向があります(図8)。

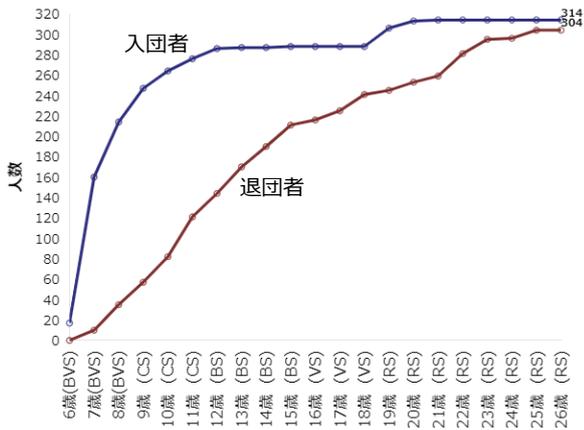


図8 Sカテゴリでの入団者と退団者数の累積
図3と違い入団者が退団者を上回っています

一方、C・Dカテゴリの団は少しの退団でも影響が大きくなります。もちろん入団もあるので、スカウト数を減らさず、図9のように堅持している団も多いのですが、元の人数が少ないと、1人の退団でも1つの学年にスカウトがない「穴」が発生しやすく(表6)、活動への影響は避けられません。

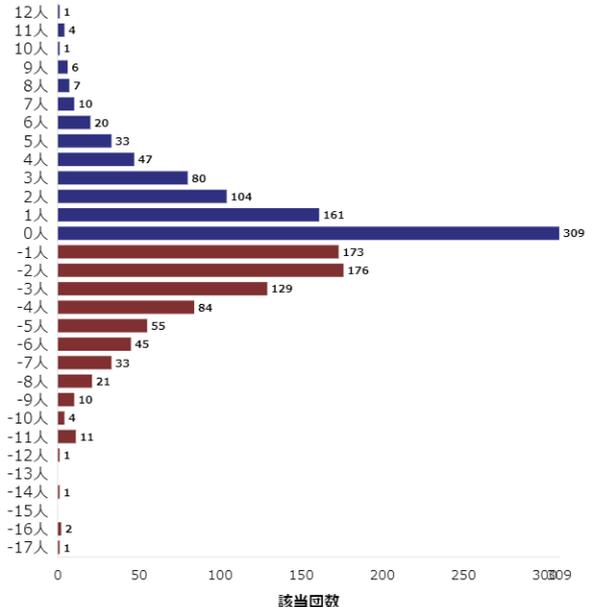


図9 増減別回数(C・Dカテゴリ)

表6 カテゴリ・穴数別 回数

カテゴリ	該当回数	穴数							平均穴数
		0	1	2	3	4	5	6	
S	18	18	-	-	-	-	-	-	0.00
A	100	91	9	-	-	-	-	-	0.09
B	330	207	102	19	2	-	-	-	0.44
C	701	217	275	143	54	11	1	-	1.10
D	575	24	84	137	158	129	40	1	2.73

穴数はCS・BSの7学年での穴を集計しています
平均穴数 以外の数字は、該当する団の数を表しています
該当回数が表5と違うのはCS・BS隊が両方あった団に絞ったためです

団の状況

ここからは、中途退団から離れ、各団からの入力データから分かった団の状況を整理します。特にカテゴリによる差を見ていきます。

以下に示す各表の値は、各カテゴリに含まれる団の値の平均です。無回答の団は集計に含んでいません。

Sカテゴリの団は少ないので、S・Aはひとつにまとめて、SAとしています。C・Dが8割近くを占めるので、全団の平均はC・Dの値を色濃く反映したものになります。

◆ 隊の状況(組数・班数)

カテゴリ別の班・組の数と、構成人数は表7のとおりです。Cは1組・1班がやとで、Dは1組・1班すら構成しにくいことがわかります。

表7 組数・班数

項目	全団	カテゴリ			
		SA	B	C	D
組数	1.60組	3.51組	2.24組	1.49組	0.90組
組員数	5.76人	6.93人	6.89人	6.12人	4.09人
班数	1.41班	2.77班	1.89班	1.37班	0.87班
班員数	5.80人	8.20人	7.29人	6.14人	3.68人

◆ 活動の状況(活動数・進級)

隊集会数はカテゴリによってかなり差があり、SAからDに向うほど少なくなります(表8)。出席率も低下し(表9)、Dでは実質的に月1回足らずしか隊集会に参加していないことがわかります。これではスカウト活動から心が離れてしまうのではないのでしょうか。

表8 年間隊集会数

項目	全団	カテゴリ			
		SA	B	C	D
BVS	20.42回	24.16回	21.85回	21.21回	16.81回
CS	17.90回	19.85回	18.36回	18.47回	16.42回
BS	15.38回	18.95回	16.85回	15.58回	13.48回
VS	7.29回	8.02回	7.62回	7.22回	6.93回

表9 隊集会出席率

項目	全団	カテゴリ			
		SA	B	C	D
BVS	75.42%	80.45%	78.79%	77.15%	68.30%
CS	75.57%	80.59%	78.95%	75.30%	72.67%
BS	62.17%	66.50%	61.33%	63.00%	60.67%
VS	47.52%	50.09%	45.59%	47.65%	48.02%

BSの班集会・班長訓練は、どのカテゴリでも、ほとんど実施されていません(表10)。

表10 BSでの年間班集会・班長訓練数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
班集会 (1班あたり)	6.71回	6.68回	6.07回	7.36回	6.21回
班長訓練	3.04回	5.34回	4.14回	3.13回	1.78回

CSで隊集会以外の集会・会議を見ると、SAとC・Dで差が歴然としてきます(表11)。組集会を除き、特にDが少ないです。組集会はSA・BよりC・Dの方が多く、人数が少ないほど組集会を中心に活動していると考えられます(ただし、C・Dでは1組しかないの、組と隊の違いは、ほとんどないでしょう)。SAからDに向うほど指導者会議は少なくなります。隊としての活動でなく、複数部門が合同で活動しているからかもしれません。

表11 CSでの隊集会以外の年間集会数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
組集会 (1組あたり)	5.12回	3.82回	4.71回	5.44回	5.29回
組長集会	2.15回	4.08回	3.43回	2.16回	0.90回
月の輪集会	2.16回	3.52回	3.01回	2.28回	1.14回
指導者会議	8.58回	11.83回	10.36回	8.41回	6.95回
テリターゲ	2.06回	3.96回	3.27回	2.09回	0.83回

ここまでのBS・CSの活動状況から、班制教育がセオリードおり行なわれていないことが浮き彫りになりました。

BSでの野営もカテゴリーにより差があります(表12)。野営の連続泊数は、1級取得に必要な5泊をSAでやっと満たしている程度です。

表12 BSでの野営泊数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
年間合計	8.14泊	12.30泊	9.68泊	8.49泊	5.77泊
最長連続	3.60泊	5.14泊	4.18泊	3.75泊	2.71泊

一方、進級はDを除き、カテゴリーによる差がありません。CSでの、うさぎ・しか・くまの取得率は8割弱ですが(表13)、BSになると毎年1つ以上進級する者は6~8割程度に留まります(表14)。

Dは進級も低調です。これでは、人数が少ないだけでなく、集会数・野営数・進級においても、スカウトが魅力を感じられない状態になっているように思われます。

表13 取得率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
うさぎ	77.74%	85.21%	79.54%	79.07%	70.67%
しか	78.21%	82.36%	81.11%	80.40%	70.62%
くま	73.57%	81.09%	79.88%	74.48%	64.30%

表14 1年間に1つ以上進級した率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
小6	71.53%	81.11%	75.81%	70.01%	66.36%
中1	65.85%	73.58%	66.42%	68.57%	57.54%
中2	68.28%	75.32%	71.12%	70.48%	58.24%
中3	59.82%	66.74%	58.92%	61.07%	55.12%

1年で2つ以上進級した者がいるので高めに計算されています

BSでの進級があまり進んでいないことから、VSへの上進段階で1級を取得できていないスカウトが6割を超えています(図10)。

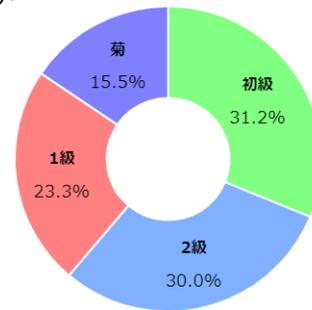


図10 VSに上進したスカウトの最終級

◆ 指導者の状況

指導者の年齢と継続年数は、人数不足からC・Dの方が高齢で長く続けている傾向がありますが、想像されるほど大きな差はありませんでした(表15・16)。

表15 隊長の年齢

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	51.76歳	48.72歳	49.74歳	52.12歳	53.80歳
CS	50.54歳	49.08歳	49.27歳	50.07歳	52.17歳
BS	48.43歳	44.67歳	46.40歳	47.66歳	51.13歳
VS	51.43歳	48.27歳	48.65歳	52.10歳	53.39歳
RS	54.00歳	50.95歳	52.95歳	54.54歳	55.32歳

表16 隊長の継続年数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	6.98年	6.08年	6.44年	6.80年	8.21年
CS	6.48年	4.74年	5.55年	6.61年	7.38年
BS	6.86年	4.64年	6.15年	6.58年	8.20年
VS	6.12年	5.26年	5.75年	6.05年	6.87年
RS	5.88年	6.08年	5.29年	5.94年	6.40年

一方、表17のとおり、指導者の人数には大きな差があり、C・Dでは、指導者の確保に苦労している様子が分かります。特にシステム上多くの指導者が必要なCSで人数の差が顕著です。

BSの指導者の人数は、SAとDで2倍以上の差があります。充てられる成人の数をそのまま反映しているのだと思いますが、指導者の人数が少ないことは、長期の野営を実施するのに障害となるはずですが。

表17 指導者の人数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	3.36人	6.28人	4.05人	3.06人	2.39人
CS	5.00人	10.87人	6.85人	4.53人	3.25人
BS	4.38人	7.68人	5.53人	4.24人	3.30人
VS	2.68人	3.94人	3.18人	2.55人	2.13人
RS	1.84人	2.47人	1.93人	1.70人	1.76人

研修所の修了率はBVS~VSの隊長で7~8割程度となっていますが(表18)、実修所の修了率は15%程度にとどまっています(表19)。SAの方がC・Dより特に良いわけではありません。

表18 隊長の奉仕部門 研修所修了率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	75.67%	83.65%	77.04%	75.67%	71.27%
CS	82.69%	82.86%	84.07%	84.59%	79.06%
BS	86.44%	85.58%	86.35%	89.51%	82.64%
VS	67.28%	71.15%	72.66%	67.50%	60.86%

表19 隊長の奉仕部門 実修所修了率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	11.26%	10.58%	12.84%	10.84%	10.82%
CS	14.13%	15.24%	17.41%	13.31%	12.81%
BS	21.61%	29.81%	21.40%	22.38%	18.75%
VS	13.94%	21.15%	14.61%	13.77%	11.18%

ボーイスカウト講習会の年間参加者はSAからDに向かうほど顕著に減っています。講習会は主に新任指導者が行くのだとすれば、指導者の新陳代謝の有無が数字に現れていると思われます(表20)。

表20 ボーイスカウト講習会の年間参加者

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
参加数	2.19人	5.27人	3.78人	1.99人	0.95人

◆ 団運営の状況

団委員長年齢と継続年数は、カテゴリーによる差がほとんどありませんが、団委員実修所修了に関しては、大きな差があります。実修所に参加できるという団の余力を示しているのかもしれませんが(表21)。

表21 団委員長年齢・継続年数・訓練修了率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
年齢	65.75歳	64.42歳	64.53歳	65.68歳	66.59歳
継続年数	9.97年	8.94年	9.43年	10.03年	10.38年
団研修了	55.43%	69.23%	60.00%	60.73%	44.29%
団実修了	9.84%	24.04%	12.00%	9.86%	5.80%

団委員会と団会議を区別して開催している率は、C・Dが低いです(表22)。人数が少ないため、分ける必要がないと考えているのかもしれませんが。

表22 団委員会と団会議を別に開催している率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
別開催率	44.94%	70.48%	59.64%	47.67%	29.06%

表23では、団運営についての13の項目が「十分できているか」の問いかけに対する回答を集計しています。SAからDに向かうほど、できていないという回答が多くあることが分かりました。

表23 団運営として「十分できている」と答えた率

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
育成会規約	66.40%	72.38%	73.82%	73.06%	53.92%
団規約	64.78%	72.38%	74.55%	69.26%	53.15%
役務分掌	40.08%	55.24%	46.91%	43.18%	30.02%
組織拡充計画	15.79%	39.05%	23.64%	14.68%	8.22%
指導者養成計画	8.23%	15.24%	8.00%	8.64%	6.50%
地域との連携計画	28.88%	36.19%	34.55%	32.12%	20.84%
予算・決算書の作成	82.73%	93.33%	90.55%	88.26%	70.36%
財源確保の方法	32.86%	46.67%	41.82%	31.43%	26.96%
団委員会議事録	42.85%	59.05%	56.36%	46.11%	28.87%
団会議事録	45.28%	62.86%	57.45%	49.74%	30.40%
名簿の作成・管理	73.89%	81.90%	81.45%	77.89%	63.86%
個人記録の管理	30.16%	43.81%	36.36%	30.74%	23.52%
備品の管理	37.31%	41.90%	41.09%	37.13%	34.61%

組織拡充計画については、Dではほとんどの団が「十分でない」と答えています。

表24のとおり体験会の開催状況にはカテゴリーの差がかなりあります。SAでは、体験会を何度も行なって入団者を増やそうとしています。C・Dでは少なくなります。

表24 体験会の年間開催数・参加人数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
年間回数	2.18回	3.23回	2.65回	2.19回	1.72回
参加人数	15.79人	20.76人	23.40人	16.49人	10.01人

体験会の非実施率を見ると、SAからDに向かって高くなり、人数の少ない団ほど、体験会を行っていないことが分かります。体験会を行なう余裕がないのかもしれませんが(表25)。

表25 体験会実施回数・非実施回数

項目	全国	カテゴリー			
		SA	B	C	D
実施回数	1,111回	88回	220回	464回	339回
非実施回数	371回	17回	55回	115回	184回
非実施率	25.03%	16.19%	20.00%	19.86%	35.18%

カテゴリーに関係なく、体験会の実施回数と非実施回数について、組織拡充計画ができているのかを見てみると、図11・12の結果となりました。

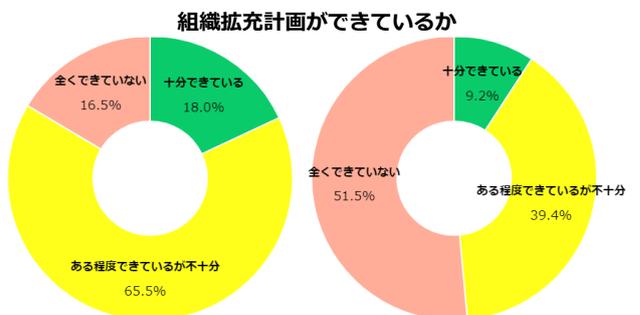


図11 体験会実施団

図12 体験会非実施団

体験会を実施していない団は、組織拡充計画もできておらず、なりゆきにまかせて新規入団を確保しているのではないかと思います。

なお、詳細は割愛しますが、体験会の開催数と新規入団者数には相関が見当たらず、全く体験会を開催しなくても20人以上の新入団を確保している団もあります。そこは体験会以外の何らかの方法を採用しているのだと思いますが、どのような方法かは、今回の調査では分かりませんでした。

指導者養成計画については、全般的にほとんどなされていないことが気になるところです。隊長の研修所修了率が高い(7~8割)のと、継続年数も結構長い(6~7年)ので、必要ないとも考えられますが、定型訓練だけで満足していることはないでしょうか。

前述に、新入団者を確保するのに計画性がなさそうなことを見ましたが、指導者の確保についても同様の状況がありそうです。

保護者は、SAからDに向かって開催数が減る傾向にあります(表26)が、大きな違いはありません。団内での指導者研修・保護者研修は、全般的にほとんど実施されていません(表27)。

表26 各隊保護者会の年間開催数

項目	全団	カテゴリー			
		SA	B	C	D
BVS	2.76回	3.86回	3.12回	2.71回	2.23回
CS	2.49回	3.14回	2.83回	2.52回	2.10回
BS	1.78回	2.42回	2.24回	1.80回	1.35回
VS	0.68回	0.96回	0.75回	0.68回	0.56回

表27 団内指導者研修・保護者研修の年間開催数

項目	全団	カテゴリー			
		SA	B	C	D
指導者研修	0.42回	0.84回	0.44回	0.42回	0.32回
保護者研修	0.24回	0.51回	0.25回	0.24回	0.17回

全般的に人数の少ない団は、複雑な運営をしなくてもやっていけるのか、計画的な団運営への注力が少ないようです。組織の規模が小さいので不要である部分もあるのですが、隊の活動を維持するだけでなく、団としてどうしていくのか考えなければ、団の再生は困難だと思います。

中途退団抑止事例

全団調査では中途退団を抑止できた事例があれば、入力してもらうようにしました。入力件数は143件で、数は少ないのですが、成功例として参考にしていただければと思いますので、その内からいくつかご紹介いたします(趣旨が変わらない程度に編集しています)。

BVS 家庭の事情があり、上進を迷っていたが、隊指導者からの声かけとCS隊の体験活動で上進した。

BVS 習い事との両立に悩んでいたが、スカウト活動の良さ(家庭ではできない体験)を保護者に理解してもらい、継続することになった。

CS BS隊への上進に迷っているスカウトがいたが、夏季キャンプでBS隊への体験入隊を行ったところ上進した。

CS 中学校に入った後の部活とBS活動の両立が難しいと考え退団の意向を示したが、隊長及び隊長以外の指導者、スカウト仲間からも働きかけて上進に結び付けた。

CS 表彰等を増やし、達成感を高めた。

CS 月の輪集会にあわせて保護者会を行い、BS隊の活動の様子、魅力、また活動で得たことなどを先輩のRS(富士章受章スカウト)から説明した。特にBSからは活動がCSと比べて変わることを、集会もCSとは違いスカウトの都合で決められることを伝えた。また、保護者やスカウトにジャンボリーなどの動画を見せてイメージをさせたことも効果があった。

CS 親の不安をたずね、早期に解消してもらえよう丁寧に説明。保護者会や個別コミュニケーション等で、普段から意思疎通しておくことが退団防止に重要と感じた。

CS スポーツクラブの練習・試合と集会の日程が重なることが多く、継続を迷っていた。本人はCSの活動が楽しいと感じていたことから、出席日数や進歩進級は一旦気にせず、可能な日だけでも来るようにアドバイスした。

CS BS上進時悩んだが、BS隊集会に参加をさせて上進を決意。

BS 両親が育成会の活動参加や役員就任に難色を示したため、団委員長が仲介して、保護者の負担を特別に軽減することにした。

BS 全スカウトの学校行事、クラブ活動の予定を把握し、臨機応変に集会日程を月ごとに変更させていく。そうすると予定のないところに集会があるので出やすくなる。

BS 参加できるときだけで良いことと、ジャンボリーに参加した経験から班長として後輩スカウトの指導を期待していることを伝え説得した。

BS 凶画写真コンテストで県連表彰されたことがきっかけで続けてみようと思った。

BS 隊長と直接ゆっくり話をした。決して強制するのではなく、いろいろな方法を模索してやることで、もう少し頑張ってみようとなった。

BS 中学受験のため、保護者が一旦、退団させたい意向であったが、辞めてしまうと戻りにくくなること、BSを続けながらも中学受験で進学校に合格しているスカウトがたくさんいることを保護者に説明して、続けることになった。

RS 自団所在地に日常居住していないRSが大多数だが、所属意識を軸に、年1回のRS報告書や成人記念式典時の後輩へのメッセージ等から、「仲間と共にしたスカウト経験が役に立っている」という本人の思いが継続の鍵。



Rowan did his duty, kicking the IM out of the word IMPOSSIBLE
Any fellow who acts like that is certain to get on.

委員会からの提言

以上述べてきたことを基に、委員会から中途退団を抑止するための方策をいくつか提言したいと思います。

ここでは、主に各団で取り組んで欲しいこと挙げていますが、団では難しく、地区・県連盟・日本連盟の分野に属するものも含んでいます。しかし、いずれの項目も、各分野の範疇でできることがあると考えます。全分野が自分のこととして考え、対策を工夫してください。

BVS・CSの保護者にBS以上の活動を伝えよう

CSからBSの上進時に多くが退団してしまうのは、BS以上の活動を知らないままに入団している現われだと考えられます。BVS・CSの保護者に対しスカウト教育への理解を深めるための「親教育」が必要です。

現在の募集はBVSからが主体で、BS以上の本格的な活動を紹介しないままに入団させているケースが多いのではないのでしょうか。入団したからには、本格的な班制教育・野外活動が実施されるBS以上も続けたいと意味がないということを親に知らせましょう。

中途退団理由の多くは、ボーイスカウトではない他の活動を選択したことで、認知能力が主体のスポーツ・習い事と異なり、ボーイスカウトが非認知能力(※)を養う教育であることを認識させましょう。そうすることで、どちらの教育も重要であり「どちらかを選ぶ」という形にしないようにすべきです。

一般社会にBS以上の活動の価値をしっかりと伝えよう

BSでは「クラブ活動優先」を理由として退団するケースが最も多いです。

中学生になると、クラブ活動は本格的な競技に参加する機会が与えられ、レギュラーに入ることを目指すなど目標が明確になってきます。スカウトが、その魅力に引かれるのは自然ですが、スカウト活動も同列に考えられるようにしたいものです。

そのためには、ジャンボリーなどへの参加がクラブでの大会出場と同じような位置付けになるようにすることや、菊・隼・富士の認知度を高め、取得スカウトが一般社会で顕彰・優遇されるようにするなどのPRが必要だと思えます。また、学校においてクラブ活動としてボーイスカウトができるようにする方法も模索すべきではないでしょうか。

保護者への説得力を高めよう

スカウトが「退団したい」と言っても、続けさせたいか、迷っている親は多く、そこで指導者(あるいは団の役員等)が改めてスカウト教育の良さをきちんと説明できれば、退団が阻止できた可能性があります。指導者は隊運営のための訓練を受けますが、スカウト教育を説明する技量は、あまり訓練されていません。コミュニケーション・カウンセリング・教育理論などについて学ぶための研修機会や教材を提供しましょう。

保護者・社会の期待に応えられる活動をしよう

子どもの教育に有効な活動であることが理解されても、活動内容が充実していなければ、失望感が退団を招いてし

まいます。調査から分かるように、集会数が少なく、班制教育が提供されておらず、進級もしない状況では、他を選択する人が増えるのは当然だと思います。活動の質の向上はもちろん重要ですが、量を増やすことも考えましょう。

団を維持するためにすべきことを考え、実行しよう

どうしても避けられない退団は一定数あります。少人数の団では、退団によるダメージは大きくなりますが、そのダメージを最小化し、リカバリーする必要があります。特に、ある年齢のスカウトがいない(穴がある)事態は、班制教育を進めるのに障害となります。

新規入団を獲得することに意識があっても、年齢ごとのスカウト数や指導者数を確認し、数年後、団・隊がどのような状態になるかについては、あまり意識が向いていないのではないのでしょうか。

団の状態を分析し、団を維持するためにすべきことを考え、何を行うか決定したら団一丸となってそれを実行しましょう。

コミッショナーの支援を受けよう

自団について、客観的にきめ細やかな分析をするのはなかなか難しいものです。団審査などを活用して評価を受け、コミッショナーのアドバイスを受けましょう。

(※) **非認知能力**とは、意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、創造性、コミュニケーション能力といった、測定できない個人の特性による能力。学力(認知能力)と対照して用いられる。学術研究によって、非認知能力の高さが学歴や雇用、収入に影響することが明らかになっていることから、幼児教育の分野で注目を集めている。非認知能力は、学力のように1人で身につけられるものとは異なり、集団での行動の中で困難や失敗、挫折などの経験を通して養われるものが多い。

◆ おわりに

全国調査では、各団のご協力を得て中途退団を含む、全国のボーイスカウトの傾向をつかむことができました。ご協力に感謝申し上げます。得られた傾向を基に、今後どうすれば良いか提言することもできました。

しかし実効性のある施策を立てるには、さらに考察が必要です。全国調査は瞬間値であり、傾向は変化しつつあります。次年度も継続して調査し、変化を追う必要があるでしょう。変化ということでは、各団の数年の加盟員数の変化を捉えた「団診断」も併用して分析が必要です。

さらにこの報告書はあくまで、全国の状況を鳥の目で観察したものすぎません。個々の団の実情はさまざまであり、調査の傾向通りの団の方がむしろ少ないと思います。団に合わせた対策は、虫の目で観察する必要がありますが、その状況を一番よく知っているのは団自身です。自団の状況に正面から向き合い、どうすれば良いか考えてください。

この調査を団・地区・県連盟・日本連盟が生かし、分析して、打開策を考えていただければ幸いです。持続可能な運動のあり方を発見できることを願ってやみません。

発行:2020年3月31日



公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟

SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN

中途退団抑止特別委員会